11月度　行事予定

会議

11/20 全国理事会

大会

11/9～24 全日本学生選手権大会　金沢

日本リーグ

11/6	1部男子	愛　知	豊橋市総合体育館	湧永製薬×本田技研
〃	2部女子	〃	〃	大崎電気×ソニー国分
11/7	1部男子	福　島	石川町総合体育館	中村荷役×トヨタ車体
〃	2部女子	〃	〃	ムネカタ×日本ビクター
〃	1部男子	福　井	福井県営体育館	大崎電気×三陽商会
〃	1部女子	〃	〃	北國銀行×プラザー工業
〃	2部男子	〃	〃	三　景×北陸電力
〃	1部男子	山　口	徳山総合スポーツセンター	日新製鋼×大同特殊鋼
〃	1部女子	〃	〃	オムロン×ジャスコ
〃	2部女子	〃	〃	大和銀行×ＪＵＫＩ
11/13	1部男子	埼　玉	志木市民体育館	日新製鋼×大崎電気
11/13	2部女子	埼　玉	志木市民体育館	大崎電気×ムネカタ
〃	1部男子	三　重	四日市市中央緑地体育館	本田技研×中村荷役
〃	1部女子	〃	〃	シャトレーゼ×ジャスコ
〃	2部女子	鹿児島	鹿児島アリーナ	大和銀行×ソニー国分
〃	2部男子	広　島	湧永満之記念体育館	大阪ガス×豊田自動織機
〃	〃	〃	〃	日本電装×竹芝精巧
〃	〃	〃	〃	トヨタ自動車×本田技研熊本
11/14	1部男子	愛　知	岡崎市体育館	湧永製薬×トヨタ車体
〃	1部女子	〃	〃	日立栃木×プラザー工業
〃	2部女子	〃	〃	ＪＵＫＩ×日本ビクター
〃	2部男子	広　島	湧永満之記念体育館	大阪ガス×竹芝精巧
〃	〃	〃	〃	トヨタ自動車×三　景
〃	〃	〃	〃	日本電装×本田技研熊本
〃	〃	〃	〃	北陸電力×豊田自動織機
11/20	1部男子	愛　知	三好公園総合体育館	三陽商会×トヨタ車体
〃	2部男子	〃	〃	トヨタ自動車×日本電装
〃	1部男子	広　島	日新製鋼呉体育館	大同特殊鋼×中村荷役
〃	〃	〃	〃	日新製鋼×本田技研
〃	〃	佐　賀	佐賀県総合体育館	湧永製薬×大崎電気
〃	1部女子	〃	〃	ジャスコ×日立栃木
〃	2部女子	〃	〃	ソニー国分×日本ビクター
11/21	1部男子	愛　知	名古屋市稲永スポーツセンター	本田技研×トヨタ車体
〃	〃	〃	〃	大同特殊鋼×三陽商会
〃	1部女子	〃	〃	シャトレーゼ×プラザー工業
〃	1部男子	広　島	広島市東区スポーツセンター	大崎電気×中村荷役
〃	〃	〃	〃	湧永製薬×日新製鋼
〃	2部女子	〃	〃	大和銀行×大崎電気
〃	1部女子	熊　本	熊本県立総合体育館	オムロン×北國銀行
〃	2部男子	〃	〃	本田技研熊本×竹芝精巧

11/26～28 プレーオフ　東京



CONTENTS

写真提供：(株)スポーツ・イベント

日本協会だより

常務理事会は恒例により8月を休みとしたため、2ケ月ぶりに開催されました。

9月度　常務理事会
日　時　9月18日(土)10時30分より
出席者　中澤専務理事、松本監事ほか9名

1、'97世界選手権大会について

第1回招致委員会準備状況報告

ア、9/21午後3：30よりホテルオークラで開催

イ、委員会に引き続き、記者発表、懇親会を実施(以上詳細は別掲「97WCニュース」参照)

ウ、招致委員会今年度費用のうち日本協会負担分500万円は招致委員会発足後取り敢えず200万円を拠出、残はこれまでの経費支払いと招致委員会の今年度総予算1900万円のオーバー分にあてることとした。

2、第48回国民体育大会並びに関連事項について

ア、組み合わせ抽選会は例年通りとする。但し出席メンバーについては専務理事に一任する。

イ、リハーサル大会は明年度より全国クラブ選手権を加え、教職員選手権大会と並催とすることに決定。

3、全日本総合選手権大会について

ア、現在、活動停止中の全日本自衛隊連盟の出場枠は、今年度は実業団連盟に渡すことを承認。

イ、大会に関わる経費のうち、日本協会役員の旅費は日本協会の負担とする。レフェリーの宿泊は全員、全期間とすることを確認。

ウ、参加申込締切日は開催1ケ月前の11月13日(土)とすることに決定。但し、学生代表の申込みは11月14日のインカレ終了後とする。

エ、使用ボールはモルテン天然皮革手縫いボールとすることに決定。

オ、男女の試合会場の割り当ては運営上の問題を考慮して開催地に一任することに決定。

カ、46回大会(平成6年度)は決勝戦を日曜日に合わせるため試合の一部を駒沢体育館で行うことを検討することとした。

4、日本リーグについて

ア、オーナー会議を11月に開催することで調整することに決定。

イ、日本リーグ会計を日本協会会計に組み入れる件については、20回リーグから実施を目標に検討していくことに決定。

5、高体連提出の選抜大会開催地変更に関する件

次回の常務理事会に佐分高体連部長に出席して頂き、検討することとした。

6、賛助金について

現状の報告があり、改善策検討のために委員会を設置することに決定。

7、登録規定、競技用具検定規定改定について

配布された両規定案についての意見は文書で提出することとした。

8、懸案事項検討のため、次の委員会を設置することとし、次回常務理事会でメンバーを決定することとした。
社会人、賛助金、競技用具、登録問題、全日本総合、国体。

9、次回常務理事会に、男子ナショナル監督、次次回に女子ナショナル監督の出席を求め、報告および今後の課題を聞くことを決定。

10、指導、普及両委員会で検討の結果、小学生用ボールサイズは、次の通り(別表参照)とすることに決定…承認
大きさ　49・5～50・5cm
重さ　255～280g

以上

小学生用ボールの規格決定

「小学生用ボール」について昨年度から普及委員会・指導委員会でアンケート調査の実施、本年小学生大会時に試作品の展示を行い協議してきた結果、去る9月18日の常務理事会に於て、小学生ハンドボール1号球が下記の通り決定しましたのでお知らせします。

記

品名　小学生ハンドボール1号球

現行（軽量2号球）
外周　54・2cm
重さ　265g

新規格品
・革の縫いボール
・32面体
・外周50cm(韓国と同じ)
・重さ265g(韓国は280g)

平成6年度第7回全国小学生ハンドボール大会の使用球として新規格品を使用します。この変更によって、松ヤニ使用禁止。

AHF理事会報告

アジアハンドボール連盟の理事会が、9月27日の9時30分から14時まで理事9名、その他3名が出席し、バーレーンのマナマ市ガルフホテルで開催された。

この理事会には、日本からの理事として渡邊日本ハンドボール協会副会長が出席された。

主な議題はつぎの通り。

1、世界選手権大会アジア予選について

前回のCOCでの決定通り極東、中東で予選を行いそれぞれの1位を代表とし、さらに2位同士による第3代表決定戦を行うことが承認された。予選開催時期、開催地は関係者で調整することとなった。

2、97年世界選手権大会の日本開催について

渡邊理事より日本の立候補について説明。出席者全員が賛成し、全面に協力することが確認された。さらにアジア連盟加盟各国に対しても協力要請の働き掛けを行う事とした。

国際ハンドボール連盟
会長　ERWIN LANC　殿

財団法人日本ハンドボール協会
会長　斎藤　英四郎

日本ハンドボール協会は1997年の「第15回男子ハンドボール世界選手権大会」の開催地として、日本が立候補いたしましたことを、ここにご報告申し上げます。

今回、日本が立候補いたしましたのは、日本ハンドボール協会は世界の人々とハンドボールを通して友好の輪を広げ、国際親善に役立てたいと希望しております。そして、この大会を日本で開催することによってこれまで以上に日本のハンドボール、さらにアジアでの発展に寄与できると、考えたからであります。

日本での開催地となる熊本は九州の中心に位置する国際都市であり、国際水準の体育館、ホテルが整備されています。国際ハンドボール連盟の役員、参加各国の選手の皆様が十分満足できると確信しております。

日本開催が正式に決定されたならば、日本ハンドボール協会は、国際ハンドボール連盟、オフィシャル広告代理店と緊密な連絡をとり、日本での世界選手権が国際ハンドボール連盟にとって財政的に十分満足できるよう努力してゆくつもりです。

日本のハンドボール関係者および熊本県民一同、日本での開催が実現することを心から願っております。国際ハンドボール連盟におかれましても、何卒、ご支援、ご協力をいただけますようお願い申し上げます。

97WCニュース

IHFに正式立候補届提出

（財）日本ハンドボール協会は去る9月9日、左記の立候補届を国際ハンドボール連盟宛に送付しました。

招致委員会発足

正式立候補を期に日本ハンドボール協会、熊本県、熊本市合同の招致委員会を設けることで合意し、去る9月21日東京虎の門のホテルオークラで第1回委員会を開催いたしました。

委員は会長の指名により次の方が就任されました。

会長　斎藤英四郎　日本ハンドボール協会会長
副会長　福島譲二　熊本県知事
〃　田尻靖幹　熊本市長
副会長　八木繁尚　熊本県体育協会長
〃　立石孝雄　日本ハンドボール協会副会長
〃　米倉　功　日本ハンドボール協会副会長
〃　渡邊佳英　日本ハンドボール協会副会長
委員　中澤重夫　日本ハンドボール協会副会長専務理事
委員　高田昭二郎　熊本県議会議長
〃　嶋田幾雄　熊本市議会議長
〃　與縄義昭　熊本県ハンドボール協会会長
〃　井　薫　熊本県ハンドボール協会理事
〃　松本重雄　日本ハンドボール協会監事
〃　日本ハンドボール協会常務理事、理事全員13名
監事　大野金一　日本ハンドボール協会監事
〃　木村剛勝　熊本県出納長
監事　中村順行　熊本市収入役

今回は以上30名の方々で構成しましたが今後必要に応じてさらに拡大することも考えられます。

第1回委員会では、委員会規約、活動計画、93年度予算等が審議されました。

委員会終了後記者会見が行われ、出席した20人近い記者諸君から活発な質問が相次ぎ、お互いに理解を深める事が出来ました。以上の行事が終わった後、委員、記者および次の方々にご出席頂き、懇親会が開催されました。

林　克也　日本オリンピック委員会専務理事
戸村敏雄　日本体育協会常務理事
増田俊明　文部省体育局競技スポーツ課専門官
山形裕子　文部省体育局競技スポーツ課事務官
熊本県　吉丸東京事務所長、佐川教育審議員、山本政策審議員、高嶋政策企画課主幹、奥園指導主事、淵上主事
熊本市　御厨助役、矢毛教育委員会事務局次長、竈企画調整局長

9月25日には渡邊日本ハンドボール協会副会長がバーレーンで開催されるIHF理事会に出席、合わせて理事諸氏に立候補支援のお願いのために出発されました。

第7回男子アジア選手権大会　結果速報

日付	No.	時間	チーム	得点	前後半	得点	チーム	備考
9月30日	17	10:00	インド	26	12—16 / 14—22	38	イラン	
	18	11:30	タイペイ	45	13—17 / 17—13 / 15—11	41	カザキスタン	
	19	15:15	カタール	19	10—8 / 9—7	15	中国	
	20	16:45	アラブ首長国	17	8—14 / 9—5	19	バーレン	
	21	18:45	日本	19	7—12 / 12—10	22	韓国	
	22	19:45	サウジアラビア	28	7—13 / 21—17	30	クウェート	
10月1日	23	15:15	アラブ首長国	19	13—10 / 6—13	23	サウジアラビア	
	24	16:45	カタール	14	9—13 / 5—13	26	日本	
	25	18:45	バーレン	24	10—12 / 14—14	26	クウェート	
	26	19:45	中国	30	14—15 / 16—18	33	韓国	

<メインラウンド順位>

A　1位　クウェート　2位　サウジアラビア　3位　バーレン　4位　アラブ首長国
B　1位　韓国　2位　日本　3位　中国　4位　カタール

日付	No.	時間	チーム	得点	前後半	得点	チーム	備考
10月2日	27	15:15	カザキスタン	34	16—9 / 18—10	19	インド	11—12位決定戦
	28	16:45	イラン	30	17—10 / 13—19	29	タイペイ	9—10位決定戦
	29	18:45	アラブ首長国	23	12—14 / 11—12	26	カタール	7—8位決定戦
	30	19:45	バーレン	25	13—12 / 12—14	26	中国	5—6位決定戦
3日	31	16:30	クウェート	24	12—7 / 12—12	19	日本	セミファイナル
	32	18:00	韓国	32	17—9 / 15—13	22	サウジアラビア	
5日	33	16:00	日本	21	11—8 / 10—6	14	サウジアラビア	3—4位決定戦
	34	17:00	クウェート	22	12—14 / 10—12	26	韓国	決勝戦

<最終順位>

1位　韓国　2位　クウェート　3位　日本　4位　サウジアラビア
5位　中国　6位　バーレン　7位　カタール　8位　アラブ首長国
9位　イラン　10位　タイペイ　11位　カザキスタン　12位　インド



IX WELTMEISTERSCHAFT
HANDBALL
JUNIORINNEN
BULGARIEN '93



第9回女子ジュニア世界ハンドボール選手権大会報告

小西　博喜

第9回女子ジュニア世界ハンドボール選手権大会は、ブルガリアのテルノボ・ガブロウ両市会場で、去る9月3日～13日まで世界16ケ国の参加によって開催された。

8月25日成田ホテルに集合し、中澤専務理事の激励をうけて26日LH711便でチェコに向けて出発した。

ジュニアの資格は年齢制限が20歳までとなっている。日本はN.P3名を除いて、国際的環境の中で果たしてどこまで選手が自分の技量を発揮できるのか。個々のうまさが高野監督の指示通りに引き出せるか。それは未知数の魅力でもあり、参加の課題でもあった。約11時間後にはフランクフルト着。1泊後、LH306便で約1時間のチェコプラハに到着。空港には親日家のDr.Murazの出迎えをうけ、約1時間半のバスでNymburkスポーツ研修所に入った。

到着早々午後4時、第1戦SVARCプラハ（チェコ2部）と対戦し26—21、第2戦はKOBYLISY（チェコ2部中位）と35—23でいずれも勝った。第3戦はSLAVIAプラハ（チェコチャンピオン、N.P7名を含む）と戦い30—21で惜敗した。

国際試合が初めてという体験者もあり、外人特有のパスワーク、ボディーチェックに慣れる意味で試験的な好材料を得た内容の試合であった。友人のケシェック氏（チェコ協会女子強化部長）の訪問をうけ、3度目の出合いが嬉しかった。

短期間のチェコ合宿ではあるが、選手たちの歓談の中から、選手たち自身が挑戦意識を模索し、生活のスマイルが試合エネルギーに変化していく生活リズムがメンタルな面でも出来つつあることを感覚的にキャッチしたので、最終戦までの必要条件として、そのムードを維持することを高野監督と雑談の中で確認しあったのはよかった。

9月1日、ブルガリア・ソフィア空港に到着。約3時間半バスで約250kmを走って、宿舎のホテルに到着。日本選手団が一番乗り。このホテルはロシア、ウクライナ、ドイツ、ルーマニア、韓国、北朝鮮の選手団、さらにレフェリー団、本部役員宿舎でもあり、活気を呈した。

大会は9月3日からA・B・C・D予選リーグを開始。日本はAグループのロシア、ルーマニアの強豪に中国を含めて4ケ国である。中でも対中国戦は当初の標的であり、同乗のバスの中でも中国の闘志、引きつった顔の表情に対し、逆に日本の軽く歌など聞える明るさは対象的。試合はまさに一進一退の攻防が続き、後半日本は5点差までリードしながら失格者を出し、さらに退場者まで出しながら、それでも得点が入るなど、大きなミスもなく、指示通り照準を合せた高野監督の采配が功を奏し、28—25（レフェリー・オーストリー）で見事に振り切った。通訳、チーム関係者全員の喜びもひとしお……（全員のムードは絶好調）。

次は第2ラウンド。A／Bリーグ、対韓国、対ウクライナ戦は、〝一足とびにクリア出来るテーマではない〟がさけては通れない課題であることも確認。そして対ドイツ戦には日本ハンドボール史上輝やく2つ目の快挙が出た。26—25（レフェリー・ブルガリア）、一攫千金の1点差とはこのこと。大会役員の誰が日本が勝つなど考えていた人がいただろうか。率直な気持ち、ドイツが勝つと信じていた。

ドイツは韓国に大接戦の末（レフェリー・ブルガリア）2点差で勝っている。ところが「柳の下にドジョウが眠っていた」のである。

最終の笛が鳴った時点で高野監督、田中コーチを選手たちが胴上げする感動は日本ならではの風景。スタンドの観客、アジアの出場国は驚きの一瞬で見ていたに違いない。

IHF役員から〝日本の歴史の中で称賛する出来事だ〟と握手を求められ、宿舎の夜の〝ロビー外交〟にまで花が咲いた。

さて、最終の11・12位決定戦は対オーストリーと34—33（レフェリー・韓国）と今度は逆に1点差の第2延長で泣いた。日本の前半がよかっただけに残念無念の一語につきる。それは口惜しさにもつながる結果に終った。前半はレフェリーの判定がやや日本寄りといった感じで、スタンドからは反発のブーイング、口笛等……。後半は、前半の感覚ペースでフリースローかと思わせると7mスローの判定、4点のリードもジワジワとツメられ、オーストリーのスピードに拍車がかかって来た。こうなると延長に入っても迫力の違いが出て来る。逆に日本の集中力が気にかかる。イージーシュートの甘さが逆速攻につながった。GKがノーマークシュートを好守しているだけに、決め手となるシュートがあと1本ほしかった。しかし、高野監督、田中コーチを始め、選手全員の健闘を心から称えたい。

韓国レフェリーを責める気持ちは毛頭ないが、順位決定だけに後味のよい笛、コンスタントな判定を期待したかった。

私は今回の経験で各国役員やレフェリー諸氏と宿舎の喫茶ロビーで〝サロン外交〟につとめ、時にはビールをさげて友好の輪を深めたのはよかった。地元ブルガリアナチェバ放送局社長から約30分間のインタビューをうけた。今回、日本チームの好成果の一因として、役員スタッフのポリシーが選手に及ぼす影響としてハーモニーの重要性を強く感じた。謝意を表し報告としたい。



IX WELTMEISTERSCHAFT
HANDBALL
JUNIORINNEN
BULGARIEN '93



世界女子ジュニア選手権を終えて

高野　亮

昨年8月、北京で行われたアジア予選で何とか世界選の出場権を獲得して一年。本大会に臨むにあたり、目標をいくつか設定した。

1、予選リーグで勝点をあげ準決勝リーグへ
2、選手個々および日本のプレーがどの程度通用するかの把握
3、選手達に「戦い方」を身に付けさせる
4、8位以内

日本はAグループに入り、ロシア、ルーマニア、中国、日本のグループである。上のグループにいくには最低1勝はしなければならない。そこで中国戦に的を絞った。

1、2戦目のルーマニア、ロシア戦は、ほとんどの選手が外国人(ヨーロッパ人)とゲームをするのがはじめてに等しい選手であり(監督としては失格と思うが)、日本のプレーがどの程度通用するのか、得点はどの位とれるのか、失点はどの位なのか、といったある面で「テストマッチ」的なゲームであった。結果、2戦共に前半で勝負をきめられてしまう。前半の失点が共に19点、得点は22～23点。この2戦の内容、戦い方を資料に以後のゲームでは、

失点：前半15点まで、前・後半で25点位に

得点：ゲーム運びを工夫し、22～23点を25～26点位に、が確認できた。

そして中国戦。昨夏、北京の予選で中国に20対30と完敗。選手達も中国戦に闘志をもやしている。昨年のゲームは、オープニングゲームということもあり、自分達の力を出しきることなく、特にオフェンスにおけるミス(シュート、パス)により敗れた試合であった。ここで何とか雪辱をし、今後代表選手として戦う上で、優位にしておかなければならない。国内における練習期間はかぎられており、この試合に勝つための方法として以下の方法を選んだ。

1、セットオフェンス中心のゲーム展開
2、速攻は、チャンスの時だけしかける
3、ディフェンスは高めに守り、自由にプレーをさせないで、なおかつ無駄な反則(イエロー、2分)は極力さける。
4、常に先手をとってゲームを進める

これにより、全体の攻撃回数は少なくなったが、相手コートに入っていく間に、次に何をするかの確認、呼吸、体力が残っており、確率の高いオフェンス(得点)をすることができた。又、逆に相手ディフェンスには、イエロー、退場者を多く出させ、常に先手をとってゲームを進行できた。サイドプレーヤー達は、速攻に関しては、ややもの足りなさもあったと思うがこの戦法を貫き通した。

結果的に、28対25とハイスコアのゲームであったが、勝利をものにすることができた。

続くドイツ戦でも、失点(前半15点まで、合計25点位に)、得点(25～26点)とゲーム運びが試合前のミーティングでの確認事項であり、前半終了と同時に喜びのあまり選手に「先生、約束はたせましたよ」と声をかけられ、「よしよし、これで後半もいけるぞ」とのミーティング。結果も絵にかいたような筋書き(26対25)で勝利を得ることができた。

失敗したゲームもあり、明暗共に経験をすることができた大会であった。

今後の課題として

1、次回のスタッフをはやく選出し、はやい時期にスタートさせてやってほしい
2、長期的な合宿計画(選手共、長期合宿を行える者の選出)
3、国外合宿(アジア、ヨーロッパ)。世界選前に少なくとも2回位のヨーロッパ遠征(経験)が必要ではないか。

以上を要望し、今大会の団長、ドクター、コーチの方々に心から御礼申し上げ、選手達の今後益々の活躍を祈念いたします。

日本リーグ 東京大会を開催して

日本リーグ東京大会実行委員会

日本リーグ運営委員会でホームアンドアウェー方式が検討されつつある中、一足先に在京チームによって実施され、その効果が出ている。東京開催は平日夕方にゲームをスタートして午後8時過ぎに終了する。この第18回では前後期5日間15ゲームを実施した。交通事情の良い東京でこそ平日ナイター開催が可能であり、仕事帰りのビジネスマンや、学校帰りの学生が、在京チームのプレーを観戦（応援）に来ることを狙った企画である。また、在京チームには休日に遠征へ出なくてもゲームができ、歓迎されている。本格的に在京チームがホームアンドアウェー方式に力を入れ始めたのが昨年末、観客動員数、ホームゲームでの成績にその効果が表れている。毎回ファイナルゲームには（午後7時から8時）大勢の観客から声援を受けて選手も力が入り、好プレーを連発した。応援もJリーグ効果で、フラッグ、チェアホーン、フェイスペインティングまで登場した。また、毎回JR主要駅に掲示するポスターは、在京チームカラーを全面に出し、ハンドのイメージを一新したもの。その結果、実行委員会事務局には雑誌・新聞・広告会社等からの問合せが多く寄せられており、メディア媒体にはこれまで以上のハンドボールの記事が掲載された。

昨年末、在京チームのリーグ運営委員と東京都協会より承認をうけた実行委員が中心となり、日本リーグ東京大会実行委員会を発足、日常業務などで精通している部分を受持ちとして会場、器材、広報、総務に分担、企画は全員で協力する事でスタートした。月2回の打合せは3時間以内とする、計画変更、進捗状況などはファクスを利用して極力時間をかけない等、工夫している。ポスター作成から会場の設営まで、敏速かつ正確に準備した。一番問題となったことは、各開催ごとに企画するアトラクションに、何を、どのように実施するかであった。いかに観客に楽しんでいただくかを検討したが、内容がなかなかまとまらなかった。ファイナルゲームの得点末尾とチケットナンバーにより、抽選でオリジナルTシャツプレゼント、高校生の参加によるロングスローコンテスト、そのまんま東氏にご協力を頂き、ライブ解説等を企画した。またチケット販売に(株)ぴあを利用して、情報誌『ぴあ』に大会情報を掲載するなど、あらゆる手段を活用した。

7月13日（火）の開催は2000名以上の入場が見られたように、観客動員を考えると月1日開催、または2週に1日程度の開催が理想的であると思われる。しかし、経費、器材の効率、会場の確保等については問題があり、トータルして考えなければならないが、今後実行委員の期待することは、多数の観客が入った東京体育館で選手に好ゲームをして欲しいこと、観客の多くに楽しんでいただくことである。平日のナイター開催は、交通事情の良い東京という地域特性を十分に生かした企画、マーケティングで毎回観客動員数更新を狙っている。

これからチーム側に望みたいことはサポーターの開拓である。多方面に活動範囲を拡大し、いわゆる営業をしてチーム、プレーヤー自身を売り込む努力を期待している。時々、東京体育館のエントランス付近で中高生がサインを求める光景を目にするが、例えゲームが敗退していても笑顔で応対し、握手もして欲しい。実行委員があらゆる手法で多数の観客を集める努力と、プレーヤーが観客に感動と喜び与える努力が積み重なってこそ、サポーター、観客動員の増加につながる。ホームゲームで大勢のサポーターから声援を受けたプレーは、100パーセント以上の力が発揮でき、ホームで有利に戦える。この辺を真剣に取組んで行けばハンドボールのメジャー化はそう遠くない。したがって日本リーグのホームアンドアウェー方式は、ハンドボールにとってメジャー化のステップである。

アメリカ戦と今後の女子ナショナルチームの課題

藤原　侑

今回の日米女子対抗は、8月31日から9月5日まで、韓国・ソウル市で開催された第2回ソウル女子国際（オリンピック・メモリアルカップ）への参加のあと、日本に立ち寄りたい意向を示したアメリカを招いて、急きょ実現した。

来日決定から開催まで、誠に短時日での準備のため、開催各地協会と北國銀行、大和銀行、オムロンなどの各企業に多大なご協力をいただいた。厚くお礼申し上げたい。

さて、アメリカ女子と日本の対戦は、日本でのジャパンカップのほか、アメリカンカップ、グッドウィルゲームなど、過去8試合を数え、日本が7勝1敗とリードしているが、来日チームは、この11月の世界選手権（ノルウェー）に出場を決めているうえ、自国にアトランタ・オリンピック（96年）を迎えることも決まっており、チーム力は上昇カーブ、決して侮れる相手ではなかった。

直前のソウル国際でもハツラツとした試合ぶりだったそうで、6カ国のうち、オランダを破って5位。他の強豪国とも競い合いを演じ、前評判を裏付けていた。

ソウル国際の主なスコアを並べておく。

ルーマニア26－21アメリカ、韓国27－21アメリカ、ロシア21－15アメリカ、アメリカ21－16オランダ、中国30－27アメリカ、韓国36－20中国、ロシア24－22韓国。

《ソウル国際・順位》①ロシア②韓国③ルーマニア④中国⑤アメリカ⑥オランダ

日本は、8月のアジア選手権（中国）で中国、北朝鮮に僅差で破れて4位。その反省の上に立ち、この日米対抗は3戦全勝、悪くとも勝ち越しの成績を残すことが目標で、ちょうど1年後に迫った広島アジア大会で「メダル獲得」をめざすためにも、内容の濃いゲームを展開することが期待された。

日米対抗に出場したメンバーは別項のとおりで、ちょうど世界ジュニア選手権と日程が重なったため、8月のアジア選手権とは、若手の顔ぶれを変更した。

アメリカは、9月8日から15日まで来日。



比嘉選手（金沢での米国戦で）

第1戦、兵庫・西宮での試合では、速攻で押しまくった日本が快勝、30－19と大差をつけた。

前半、10－6とした日本に対し、アメリカは後半スタートで9－10と巻き返した。日本が退場者を出したスキに3失点したもので、アメリカを勢いづかせたか、と思わせたが、日本はあわてず、この場面からミスの多くなった相手に対して攻め込み、じつに11連続得点、頼もしさを感じさせた。

だが、第2戦となった石川・金沢の12日の試合では、アメリカが第1戦では見せなかった粘りを見せて崩れず、23－22と逆に日本を下した。

アメリカはシャロン・ケインの中央ミドル、キム・クラークの左アウト突破などで4－1と好スタート、貴田の好調なロングなどで追う日本の追撃に耐えて、前半を11－10と奪った。後半に入り、アメリカの1点リードのまま、一進一退がつづいたが、15分に日本は15－17から比嘉のミドル、PT2本で18－17と逆転、この場面は相手退場機で、さらに、たたみかけるチャンスだったが、自らの速攻のボールがミスとなったところを

逆速攻につながれて同点に戻された。

さらにアメリカは、日本のミスを拾った逆速攻などで息を吹き返し、20―18、22―19、23―20とリードを保った。日本は西の活躍などで終盤22―23まで迫ったが、ついに追いつけなかった。

1勝1敗となった日本がどうしても負けられない第3戦は、13日、京都で行われた。この試合も好調のアメリカは、前半からシャロン・ケインのセンターでのリードに周りがよく応え、トニー・ジャムソン、キム・クラークらの視野外を使った走り込みからのミドル、クリスティン・リセのポストなどで日本に対抗、互角の展開を見せた。


トニー・ジェイムソン選手

日本は、このシリーズを通じて好調の貴田のロング、比嘉のセンター攻撃、松下の右サイドなどで戦い、前半は9―9。

後半の日本は、谷本のロング、松下の速攻、谷本の速攻で12―9、アメリカはPT2本で押し返して、12―11と再び1点差。日本が貴田のロングなどで15―11とすれば、アメリカはシャロン・ケイン、キム・クラークらで13―15、左腕パット・ニーダーの回り込みなどで15―16と、また1点差に戻した。

金沢の例があるので心配させたが、ここからの日本は、第1戦の「たたみかけ」を復活、貴田、西のロング、比嘉の中央ミドルで一気に20―15と引き離し、終盤には、新鋭・田中もロングを決めるなどして、結局、22―16でアメリカを下した。

今回の2勝1敗は「勝ち越した」という意味では評価できるものの、現在の日本の現状と課題をさらけだした結果だともいえる。

8月、中国でのアジア選手権で表面に出てきた「短所」が、金沢での1敗に集中して出たからだ。

◆後半なかばの、勝負所でミスが集中、とくにシュートミスが目立つ。

◆速攻時に相手の身長、横幅などを読み切れずインターセプトされる。

◆速攻がミスになったとき、帰りきれず失点になる。

◆相手退場機の攻防で、日本の有利な展開に持ち込めない。

◆逆に日本に退場者が出たときには、守り切れず2失点することが多い。

などは、アジア選手権の反省とピタリと重なってくる。

とくに速攻機の得点率が低くなっていることは問題で、このあと、さらに速攻を磨きつつも、「無理な速攻は中断する」という判断も必要になってくる。さらにコート内でこのような判断を下し、コントロールタワーとなるリード・オフ・マンを養成せねばならないことも大きな課題だろう。

第2戦、第3戦で、アメリカの追撃を許し敗戦、苦戦につながったのは、ディフェンスの甘さに尽きる。ディフェンス面では、とくに各選手の視野の狭さが指摘できるが、これは、全日本としてのゲームキャリアの不足にも関連していると思われる。今後の長期合宿などで埋めていくになる。

良い芽もあった。とくに貴田がエースらしくケレン味のないシャープなロングを打てるようになってきたことだ。試合のなかでは疲れからか、前後半の終盤が甘くなるが、ここを克服できれば、真のエースとして脱皮できよう。世界ジュニアで高得点をあげた松本恵美(日立栃木)も育ってきており、このポジションでの交替要員となってくれれば、貴田の負担も軽くなるはずであり、期待したい。

ジュニアには、この松本だけでなく、好選手が多く、各選手とも急成長を見せてくれている。今回、日米対抗を戦ったメンバーとの切磋琢磨のなかで、より強い全日本が生まれ得ると信じている。

中国・北朝鮮とも、アジア選手権では遅れをとったが、決して遠い存在ではなく、手が届く距離にいる。広島アジア大会では、この両国を倒してメダルを獲得、さらに韓国に挑戦していける位置にいると確信する。スタッフ、選手の精進を見守っていただきたい。

第15回東日本学生選手権大会

早稲田の4連覇を日体大が阻む

女子は東女体大が日体大を下して8連覇を達成

関東学生ハンドボール連盟　委員長　菊田　源

　平成5年度第15回東日本学生ハンドボール選手権大会は、平成5年8月17日より21日の5日間にわたって、山梨県甲府市において男子32大学（北海道6・東北6・北信越5・関東15）、女子16大学（北海道1・東北2・北信越3・関東10）の合計48大学が参加し、予選リーグ・決勝トーナメント方式にて開催された。

　男子は早稲田大の4連覇、女子は東女体大の8連覇がなるか注目される大会となったが、男子は関東学生春季リーグ3位の日体大と同4位の早稲田大の間で争われ、日体大が5年振り3回目、女子は予想通り関東学生春季リーグ1位の東女体と同2位の日体大の間で争われ、東女体大が8年連続と連続記録を伸ばし9回目の優勝をそれぞれ飾った。

男子

　男子はここ数年、北海道、東北、北信越と関東上位校との実力接近が目立ち、予選リーグから熱戦接戦が見られているが、今回も戦前の大方の見かたでは予選リーグのF・G・Hの各組で関東勢と決勝トーナメント進出（進出大学は全日本学生選手権大会の出場権獲得）をかけて熱戦とされていたが、予想にたがわず1点を争う好試合が展開された。

　A組は春季リーグ優勝の国士館大の調子が今一つで、日本大が新方の好リードで積極的な攻めを見せ残り15秒で逆転し、決勝トーナメント進出を果たすと共にインカレ出場権を獲得した。

　B・D・E・F各組は順当にシード校が勝ち上がったが、F組の函館大と中央大の一戦は、春季リーグ不振であった中央大がどのような試合を見せるか注目されたが、今大会も調子が出ず予選リーグで敗退して、インカレの出場権も失ってしまった。

　G組は1点を争う展開となったが、うまくまとめた東海大が東北学院大の追撃を振りきり、21－20で逃げ切り勝ち上がった。

　H組は順天堂大が、永山（全日本）が良くチームをリードし、斉藤（東日本学生選抜）、田村などで、大壁（東日本学生選抜）を軸に積極的な攻撃を見せていた金沢工大を、残り10分からの守備陣の乱れを衝いて振りきり勝ち上がった。

　予選リーグ各組1位が決勝トーナメントに進出したが、惜しくも予選リーグで敗退した中では、仙台大、千葉大の健闘が目についた。

　決勝トーナメント1回戦は、予選リーグで優勝候補の国士館大を敗った日本大がその勢いをそのまま持続し、新方のリードで松谷、飯原（東日本学生選抜）などが打ちまくり、東海大を圧倒して勝ち上がった。

　早稲田大－法政大は、早稲田大が五島の好リードから石木のポスト、平田のロングを使い分け、多彩な攻めを見せ勝ち上がった。

　日体大－函館大は、冨本・小沢の全日本コンビに藤井などが絡んで速い攻めを見せた日体大が、東日本学生選抜のドイツ遠征から急激な伸びを見せた渡辺を中心にして、セオリー通りの堅実なゲーム運びの函館大を圧倒して準決勝進出を決めた。

　筑波大－順天堂大は、GK栗山（東日本学生選抜）の好守を背景に児島・誉田・藤林他のスピードのある攻めを見せた筑波大が、順天堂大のキーマン永山（全日本）をマークした好守で快勝した。

　準決勝は予選リーグから快進撃の日本大と、春季リーグはチーム整備の遅れで4位の早稲田大の対戦が注目されたが、前半25分まで10－8と早稲田大がリードし、このままと思われた直後、松谷・新方・飯原が連続得点して逆転、前半は11－10の日本大リードで折り返した。後半、早稲田大のディフェンスが見違えるように良くなり、13分間に2点とおさえている間に連続加点して4点差として、その後の日本大の追い上げを交わして一部の面目を保った。

　日体大－筑波大は、予選リーグから常に30点以上の得点で快勝して来ている日体大のスピードある攻撃が衰えず、前半15分までは誉田・横越・広政などで互角に進め、筑波大もその後は連続加点を許し、前半20－13と7点差で折り返した。しかし、後半は筑波大が盛り返し一進一退の展開を見せたものの、前半の貯金がものを言って日体大が勝ち上がった。

　三位決定戦は筑波大が前半2点のアヘッドを後半に取り返して、一時は24－21と筑波大の展開となったが、26分以降日本大が3連続得点で同点となり、延長戦に入った。

　延長線では栗山の気力あるキーピングから最後は横越が連続3得点して、筑波大が三位を確保した。

　決勝戦は早稲田大の4連覇なるか注目されたが、立ち上がり日体大がペースをつかみ、冨本・藤井で先行し、その後もコンスタントに得点を重ね、五島・石木・江口などの得点で渡り合う早稲田大に4点差をつけて前半を終了。後半に入ると早稲田大の追い上げが始まって、17分には26－25と1点差まで追い上げたものの、その後、日体大が早稲田大を8分間無得点におさえると共に、小沢・茅場・小沢の連続得点で4点差として、その後の早稲田大の得点を1点におさえ優勝した。

女子

　女子は、予選リーグでは特に波乱もなく、シード大学が順当に勝ち上がり、決勝トーナメントは関東の春季リーグ上位4大学の東女体－日女体大、日体大－筑波大の対戦となった。

　東女体大－日女体大は、東女体

大が飯田・佐藤・山田等でコンスタントに得点し、16－9と前半で勝負をつけ、後半も余裕のある試合運びで決勝へ進出した。

日体大－筑波大は、開始早々に小貫・沖土居・宮本と連続得点した日体大が終始リードして、稲次・大井などの得点で迫る筑波大を押し切った。

三位決定戦は筑波大－日女体大となったが、東田・大井・小谷内・稲次などの得点で前半リードの筑波大が、そのまま行くかと思われたゲーム展開であったが、後半、日女体大が岩村・熊井・野口などで追い上げ、26分46秒に熊井のシュートで1点差にした。しかし、その直後に稲次が連続2得点して筑波大が辛勝した。

決勝戦は、東女体大－日体大の争いとなったが、東女体大＝飯田、日体大＝何（元中国代表）の両ゲームメーカーが注目される試合となった。前半は何が新井・宮本を生かし、日体大が1点リードで終わったが、後半に入ると東女体大が永山・武藤・山田などの得点で8分には同点として、9分22秒から5点連取して19－14にして、そのままのリードを守り優勝した。

今大会を振り返って見ると、男子は関東以外の3地区の上位大学との差がなくなり、予選リーグが徐々に充実して来ている事が物語られている。

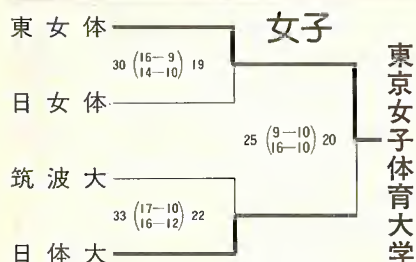
女子は依然として関東上位4強の壁は厚かったが、関東の二部の実力アップが見られてきている。

なお男女優秀選手以外でも、優秀選手と遜色ない活躍した選手は文中に記載した通りである。

東日本学生選手権大会結果

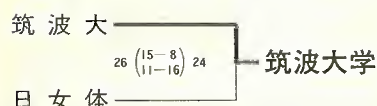
決勝トーナメント

女子



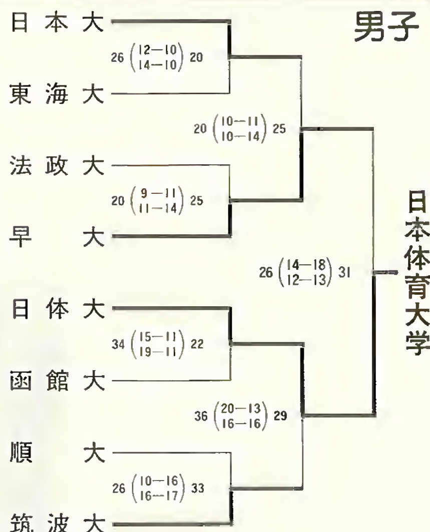
東京女子体育大学

■ 3位決定戦



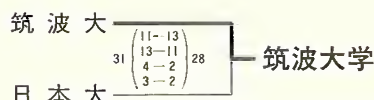
筑波大学

男子



日本体育大学

■ 3位決定戦



筑波大学

■予選リーグ順位

男子	1位	2位	3位	4位
A組	日本大学	国士舘大	東北大学	北海学大
B組	筑波大学	仙台大学	北海道大	金沢大学
C組	日本体大	千葉大学	東北福大	小樽商大
D組	早稲田大	明治大学	新潟大学	札幌大学
E組	法政大学	国際武大	秋田大学	長野大学
F組	函館大学	中央大学	岩手大学	東京農大
G組	東海大学	東北学大	慶応大学	富山大学
H組	順天堂大	金沢工大	道都大学	青山学大
女子	1位	2位	3位	4位
A組	東女体大	東北福大	千明短大	東海大学
B組	日本体大	茨城大学	玉川大学	金沢大学
C組	筑波大学	東京学大	北海女短	信州大学
D組	日女体大	国士舘大	仁愛短大	福島大学

男子第32回・女子第23回西日本学生選手権大会

大体大が4年連続19回目の優勝

女子の関西対決は武庫川女大が圧勝

九州学生ハンドボール連盟理事長　田中　守

全日本学生選手権の予選を兼ねた西日本学生選手権が、8月13日(金)より5日間に亘って、福岡市民体育館をメイン会場に福岡市南体育館、西南学院大学体育館の3会場で開催された。西日本各地より予選を勝ち抜いてきた精鋭男子32チーム、女子16チームが参加し、実施された。(大会結果は前号に掲載済み)

男子

男子は、予選リーグでの波乱はなくシード校が順当に決勝トーナメントにコマを進めた。ベスト8では関西2強の対決と東海3強のうちの2強の対決が好カードであった。関西同士の対決は、力に勝る大阪体育大学が大阪経済大学を徐々に突き放し、10点差の完勝でベスト4にコマを進めた。一方東海同士の対決は、春季リーグを制した中部大学が先行する展開であったが、粘る中京大学が後半12分過ぎ、得意の速攻で逆に主導権を握り、6連続得点で勝負を決めた。他は、シードで良いポジションを得た名城大学が13年ぶりのベスト4進出を果たし、福岡大学も順当にコマを進めた。

準決勝第1試合は、やはり力に勝る大阪体育大学が名城大学を徐々に突き放し、決勝にコマを進めた。準決勝第2試合は、波に乗る中京大学が先行する展開であったが、福岡大学も離されそうで離れず、残り1分で再三再四に亘る同点に追いつき延長戦となった。延長戦は、福岡大学が先行する展開で勝利をほぼ手中に納めた残り10秒、思わぬパスカットから中京大学が同点に追いつき、PTCとなった。PTCは3人で決まらずサドンデスに入って福岡大学GK坪根がシャットアウト、そして清水がしっかり決めて3年ぶりの決勝進出を果たした。

決勝は、昨年の全日本学生選手権覇者で190cm台を3名揃える大阪体育大学と、GKを除いてCP全員が180cm以下という好対照の福岡大学との3年ぶりの決勝対決となった。両チームともにDF力、GKの攻守が目立ち、9対7のロースコアで前半を折り返した。後半、ようやく大阪体育大学のセンター松村とポスト石塚のコンビが合い始め、向井のミドル、柴田のサイドとセットオフェンスで着実に加点、大阪体育大学が4年連続19回目の優勝を飾った。3位には平均身長185cmの大型チーム名城大学が接戦をものにした。

女子

女子は、昨年初の予選リーグ敗退で屈辱を味わった大阪体育大学がシード校である福岡教育大学を破って準決勝進出を果たし、他は武庫川女子大学、福岡大学、中京女子大学が順当にコマを進めた。

準決勝第1試合は、武庫川女子大学がセットオフェンスで攻めあぐむも、中京女子大学の拙攻に助けられ、DFからの得意の速攻で着実に加点、力に勝る武庫川女子大学が圧勝し、決勝にコマを進めた。

準決勝第2試合は、センターDFが175cmと176cm、GK友貞も172cmと大型新人3枚を加えた大阪体育大学と、フローターが160cm前後と対照的な福岡大学との対戦。前半、福岡大学のペースで折り返すが、後半大阪体育大学も1年生ゲームメーカー池原の加入で攻撃にリズムが出、一進一退を繰り返して延長戦に突入した。延長線も一進一退を繰り返したが、残り15秒で福岡大学森下がサイドからの強引なカットインで勝利が見えた途端、福岡大学に悪夢が襲った。DF要員との交替の間に大阪体育大学が攻め込み、池原の強引なサイドシュートでノータイムペナルティとなった。これを池原が決めてPTC、GKに勝る大阪体育大学松尾が2本連続でペナルティを阻止し、決勝進出を果たした。

決勝は3年ぶりの関西対決となった。スピードが売り物の武庫川女子大学は前半から得意の速攻で一方的にリード、後半に入って大阪体育大学にようやく持ち味のスピードが出てきたが、要所を新人GK中井に攻守され、武庫川女子大学の2年連続12回目の優勝となった。3位には後半に入って得意のスピードにのった多彩な攻撃で9連取した福岡大学が圧勝した。

第1回普及委員会中学生専門委員会開かれる

8月19日、普及委員会の第1回中学生専門委員会が奈良県生駒市の生駒山荘で開かれた。出席者及び議事内容は次の通り。

▼出席者

加藤正喜（中体連本部・協会評議員）／真田元（関東）／清水勝（北海道）／根本真（東北）／谷口孝治（北信越）／溝口博一（東海）／佐々木英明（近畿）／望月裕之（中国）／竹内強（四国）／妻鹿実（九州）／小西博喜（協会）／神田清（大阪）／東嘉伸（大阪＝委任状）／〈以下オブザーバー〉土井喜光（奈良）／中川敏文（奈良）

▼議事内容

1、第3回ジュニアオリンピックカップ・ハンドボール大会開催要項について

第2回大会要項の変更する事項について協議した。

①開催時期を平成6年12月下旬（2学期終了後）に開催することとした。

②チーム編成は選抜とする（原則を削除）。

③参加対象は1、2、3年までとする。

④男子は身長180cm以上を1名以上、女子は身長170cm以上を1名以上含むことが望ましい。

⑤男女ベスト7を選び表彰する（大阪府協会）。

（変更内容）

有望選手の素材発掘と育成をねらいとする。

従来の3月下旬の開催は、春の高校野球と重なるため、マスコミ報道関係取材の対象にならない。TV放映も検討したい。また、全国高校選抜と重なるため、高校指導者の目が集まらない。

2、全日本中学生選抜チームの海外遠征強化について

中学生のジュニア強化育成を考えて、第3回大会（12月）終了時に全国中学生選抜男女チーム（仮称）を編成し、3月に韓国遠征を実施したい。（アジア地区）（役員5名・選手15名程度）

3、大阪主管協会との打ち合わせ事項について

①ミズノ㈱の協賛金について

第2回大会について、日本協会で折衝した結果、昨年と同様200万円が決定した。

②大阪協会として、各出場県からプログラム広告が貰えれば（10万円～15万円程度）、実費（凸版等の場合）だけの徴収で、残りを還元し各出場チームの準備・経費に援助したい。

③第2・3回大会開催要項を11月頃までに各都道府県宛に通達してほしい。

昨年同様、各都道府県協会、ブロック協会と各都道府県・ブロック中体連とのコンセンサスを周知徹底し、予選会・経費財源づくり等の準備体制を検討するための期間が必要である。

4、その他

第1回大会開催を堺市で実施したが、大阪協会と連動して、行政の積極的な支援体制がさらにできつつあることなど格別の好評を得ており、ボランティア団体の援助も進行しているとの報告があった。

（文責・小西）

全日本教職員ハンドボール選手権大会

第1回マスターズ大会レポート

日本ハンドボール界の長年の懸案であった第1回マスターズ大会が、全日本教職員ハンドボール連盟の主催で8月9日（月）～11日（水）の3日間、愛知県豊田市の中京大学体育館で開催された。

今回は、平成6年度「愛知わかしゃち国体」リハーサル大会第36回全日本教職員ハンドボール選手権大会の期間中に会場を別にして行われた。

参加資格は男子40才以上、女子35才以上として、チーム編成については県別、地域別等多少の幅をも認めていた。

参加チームは男子5チーム、女子4チーム、往年の名（?）選手100名余が久しぶりにカラフルなユニフォーム姿でコートに立ち、元気いっぱいプレーを楽しんでいた。

開会式は9日(月)午後5時から会場近くのレストランを借り切って行うという全国大会ではめずらしい形で行われた。

最初は、本大会を開催するに至った経緯、主旨説明、組合せ抽選、審判員紹介の後、開会式となった。

主催者あいさつは、全日本教職員ハンドボール連盟高橋健夫会長より、生涯ハンドボールの実践の場がこの教職員連盟から第一歩を踏み出すことは非常に意義深いことであり、喜ばしいことで、今後も継続・発展していくことを確信しているという内容であった。

来賓あいさつとして、愛知県ハンドボール協会太田耕治会長、豊田市ハンドボール協会渡邊黄一会長の方々からお祝いのことばと、けがの無いよう友好親睦を深めることを期待しているという内容であった。

最後に中部ドリームス下山玲子さんが選手代表とし、本大会に参加する抱負を述べ、式を終った。

つづいて、愛知県ハンドボール協会伊藤和夫副会長の音頭で乾杯の後、懇親会となった。久しぶりに会って、近況を報告しあったり、昔の大会の思いでばなしをしたりしていた。また、子連れの参加者も多く、懇親会は非常に和やかなものであった。

第1日目（8月10日(火)）は、10時から試合が開始された。コートは18×33ｍ、20分－10分－20分、試合間隔は20分をとるなど、マスターズ大会らしく配慮されていた。

試合中も真剣にプレーする中で、思わず反則をしてしまった場合、互いに握手をしたり、手を挙げ会釈をしたり、素晴らしいプレーには思わず拍手したりするなど、他の大会では見られない光景が多くあった。

途中で参加者全員が集まり、記念写真を撮ったこともよい思い出となった。

また、この大会の特色は、各チームから運営委員を出してもらいゲームのオフィシャルを手分けして行ったこと、また、個人賞授与のため対戦チームの中から毎回3名を推薦し、その総合計で決定するなど、いろいろと趣向が凝らされていたことである。

10日の夕食も、開会式の時と同じレストランに全員が集まり、最年長者のロイヤルスワロー北山隆選手の乾杯の発声で始まった。前夜よりさらにうちとけた雰囲気で夕食交流会が進んだ。

第2日目(8月11日(水))は、閉会式の都合もあり、9時からのスタートとなった。前日2試合を消化したためか、選手には疲労の色が目立った。しかし、試合が始まると前日にも負けない味のあるプレーが随所に見られ、応援観客の中からしきりに拍手が起こっていた。

会場の一角には、スポーツドリンクの試飲場が設置され数種類の

成績発表、表彰につづき高橋健夫連盟会長から、試合の雰囲気、

飲み物が無料で自由に利用できたのも好評であった。

閉会式は11日(水)14時から、同大学体育館内の講義室で行われた。

各種のアイデアなど生涯ハンドボール大会にふさわしいものであったという主旨のあいさつがあった。

また、参加者代表あいさつとして男女優勝チームから梶川佳孝(全教員三重)、三浦初枝(中部レディース)の両氏が、よろこびと今後の抱負を語った。

この大会期間中に参加者にアンケートを依頼してあったので、その中間の報告を角紘昭委員からあった。参加資格、コートのサイズ、宿泊条件、開催場所など、今後の課題が提示された。

式の後、つづいて簡単な会食が用意され、互いの健闘を讃えあったり、次回の再会を約束しながら散会となった。

参加登録名簿による各チームの平均年令は次のようであった。

▼男子チーム（総平均年令43・4才）
埼玉教員－41・3才
ＡＴＦ－45・7才
全教員三重－43・3才
ロイヤルスワロー－44・2才
サンフレ広島－42・6才

▼女子チーム（総平均年令37・1才）
とべないカモメ－32・3才
中部ドリームス－37・1才
ガンバルズ－41・5才
瀬戸内レディス－37・6才

全日本教職員選手権大会第1回マスターズ大会結果

■第1日目

◎男子の部

ロイヤルスワロー	24－18	サンフレ広島
埼玉教員	22－6	ＡＴＦ
全教員三重	25－22	ロイヤルＳ
ＡＦＴ	22－10	サンフレ広島
全教員三重	23－20	埼玉教員

◎女子の部

とべないカモメ	17－9	中部ドリームズ
中部ドリームズ	21－8	瀬戸内レディース
瀬戸内レディ	13－10	ガンバルズ
とべないカモメ	15－15	ガンバルズ

■第2日目

◎男子の部

ロイヤルＳ	23－19	ＡＦＴ
全教員三重	24－19	ＡＦＴ
埼玉教員	21－15	サンフレ広島
埼玉教員	25－17	ロイヤルＳ
全教員三重	27－13	サンフレ広島

◎女子の部

中部ドリーム	17－10	ガンバルズ
瀬戸内レディ	18－17	とべないカモメ

●順位
〈男子〉①全教員三重②埼玉教員③ロイヤルスワロー
〈女子〉①中部ドリームズ②瀬戸内レディース

ドミニカのハンドボール指導

青年海外協力隊員　望月　尚美

　平成3年7月から2年間、私は青年海外協力隊員として、カリブ海の島国ドミニカ共和国に行った。私の任務はこの国唯一の体育教師養成学校である国立体育学校で、ハンドボールと体育レクリエーションの授業を担当することであった。

　実のところ、ハンドボールは高校時代3年間の経験しかなく不安だったが、レクリエーションの指導には自信があった。ところが現地に行ってみると、学校は既にレクリエーションの教師を雇っており、私はプロフェソーラ・デ・バロンマノ（ハンドボールの教師）と呼ばれ、ハンドボールをメインに活動することになってしまった。

　国立体育学校は三年制であるが単一学生で現在生徒数が男子19名、女子13名の小さな学校である。生徒の年令は20才前後。授業に入る前に生徒に質問すると、ハンドボールをやったことがある者は男子に2、3名いただけで、女子のほとんどはどういう競技であるかすら知らなかった。これで私も気が楽になり基礎的なことから教え始めたのだが、学校のコートは18m×36mのコンクリート製で、コート内にテニスの支柱があり、しかも錆びたゴールポストは1つしかないという有様だった。しばらくしてこの1つも壊れてしまい、JICA（国際協力事業団）の援助で購入できるまでの半年間は段ボール箱をゴールに見立てて授業をした。



　ドミニカはアメリカに近いため、スポーツもその影響を受けて野球やバスケットボールをよく練習しているせいか覚えが早かった。特に男子はめきめき上達し、日本のビデオを見せるとスカイプレー等も自発的に練習しだした。しかし一方で、ジャンプシュートのステップを覚えるのに一年以上かかった女子生徒もいる。最終的には、一応ハンドボールらしいゲームができるようになり、授業のカリキュラムの立て方や指導案の書き方も教えることができたので、私でも少しは役に立ったかなと自負している。



　さて、ドミニカのハンドボールの歴史は浅く、1980年頃スペイン人によって伝えられたのが始まりらしい。この国にも年に一度国体があり、ハンドボールも正式種目になっている。男子は国内に10チームほどクラブチームがあり、その内の4チームは首都サントドミンゴ市にあって、年に2回リーグ戦をやっている。また、各チームから選抜された選手によるナショナルチームもある。中南米やカリブ海諸国との試合に出場するためのものだが、予算の都合でなかなか実現できないでいる。

　チームのメンバーは、学生、弁護士、会社員等様々で各自が何とか時間を調整して練習に来るのだが、全員が揃うことは難しい。また、練習に使っているコートは学校のものと同様いい加減、さらにボールは個人持ちという状況である（ボール1個の値段は、この国の最低賃金の½以上する）。当然、チームの実力は『語るに及ばず』という現状だが、選手は皆手足が長く、ジャンプ力もパワーもあるので、良い環境、良い指導に恵まれれば必ず強くなるように思えた。

　この国にはハンドボールに関する資料はほとんどなく、それでナショナルチームのコーチも私に相談に来るのだが、知識・経験共に乏しい私には、手持ちのビデオをプレゼントするぐらいしかできなかった。しかし、父が送ってくれた日本ハンドボール協会の『ハンドボール大系』というビデオは練習内容が細かく説明されており、日本語がわからなくても理解しやすく、大変喜んでもらった。

　全てが未熟で、まさに発展途上のドミニカのハンドボール。でもその中にも、日々上達したいと汗を流す若者達がいます。日本の国際貢献が求められている今、ハンドボールを通して彼らに手を指し述べて下さる人の多からんことを願っています。

新連載
ハンドボールの指導法

指導委員会委員長　大西　武三

はじめに

今月号からハンドボールの指導法について連載することになりました。とりあえず、私が、技術・指導担当理事をしていることもあり、この稿を進めて行くことになりました。現場の指導者の要望を受けながらQ&Aの形式で、指導に於ける身近な問題を取扱ながら書き進めたいと思っております。この講座が一方通行にならないように是非とも皆さんから指導上の諸問題を提示して頂き一緒に考えて行ける事を期待しております。

是非、指導に関する質問を機関誌編集係までお寄せ下さい。

日本のハンドボール指導者が連携すれば

日本のハンドボールの競技人口は約10万人、チーム数は約５０００である。従って指導者は５０００人以上はおられるはずである。もし、このあらゆる階層の指導者が指導を進めて行く結果、ハンドボールの普及や競技力の向上につながって行くとすれば、どんなに素晴らしいハンドボールの世界が開けることであろうか。

ハンドボールの華々しいトップレベルの大会等を見ているとつい底辺にある名もないチームやプレイヤーの事を忘れがちである。しかし日本のハンドボールがこれらの底辺によって支えられていることを決して見逃してはならないし、逆に底辺をより豊かにしてこそ、ハンドボールという高い山がそびえることを肝に命じなければならないと思う。

指導者が連携する道は一通りの方法ではありません。一生に一度、一人だけでもハンドボール界を背負うような人材を見つけていただければ、それは素晴らしいことであり、何にも変え難いハンドボールに対する貢献ではないでしょうか。

この講座の主旨

指導者のチームへの接し方は千差万別である。ハンドボールを専門的に学び指導者となられている人、経験は全くないのに学校側から頼まれ、顧問の名の元に指導者になっておられる人。情熱の全てをハンドボールに賭けている指導者がおられる一方、学校や家庭の状況で情熱を賭けようにも賭けられない人。また目指す方向も日本のチャンピオンを目指しておられる人がおられる一方、それどころかチームを維持するのがやっとと言う方もおられるはずである。

何れにしても日本の競技人口の80パーセントは高校生以下で占められている。本講座としては中高校生のしかも専門的にハンドボールをやっておられない指導者を対象として、ハンドボールの指導法に関する資料を提供することによって少しでも指導のお役にたてればと思います。

第1回は実際的な内容にふれることが出来ません。徐々に実際的具体的な内容にして行きたいと思っています。私も現場の指導者であり、悩みは多々あります。情報を交換しつつ悩みを分かち合いたいと思います。

「ハンドボール指導法教本」について

日本ハンドボール協会では指導委員会のメンバーが中心となって、１９９２年の暮れに大修館書店から「ハンドボール指導法教本」を出版した。この指導書は、公認指導者の養成用の本として企画・編集されたものである。しかし、それにこだわる事なく、全ての指導者、あるいはプレイヤーにも参考にしていただけるよう書いたものである。指導法教本ではハンドボールに関する指導法の一通りを書いたわけですが、実際の現場では痒いところに手の届かない記述や説明不足もある事かと思います。それを補足しながら、また、時として引用しつつ、あるいは別の角度から書き進めたい。

ちょっと話はわき道に反れますが、この指導法教本の印税は日本ハンドボール協会の財源にもなります。是非一読して頂き、ご意見ご批判を頂きより良いものにしていきたく思っております。

ハンドボール指導法教本の詳しい説明は機関誌No.３２６　１９９２年12月号にあります。

質問　毎日の練習ではどのようにやって行けば良いか？

さて本題に入りますが、標題は、連載の第1回として、機関誌担当者から頂いた質問です。

この質問は、誰もが知りたいものであり、日々当面する問題でもあります。簡単に答えられるように思われるかも知れないが、実は考えれば考えるほど奥が深く、これに明快な答えを出せれば、ハンドボールの指導法を極めたと言えるものではないかと思います。連載の一回ではとても書ききれるものでなく、いくつかの前置きや課題に分割して稿を進めて行くのがよいかと思います。

一流のゲームや練習を見てほしい

「日々の練習は…？」の質問が出てくる背景には、指導者がハンドボールのゲームとはどんなものかその全体像がつかめない。或いは、ゲームを構成している要素が解らなくて、何をどんな風に練習して

行けばよいのかが解らないといったことがあると思われる。

この連載で指導に関することを書いても、恐らく直接的な刺激にはならないのではと思います。書物などで理論的な勉強は必要ですが、それに加えて「百聞は一見にしかず」の例え通りトップレベルの試合や練習を実際にみてほしいと思います。またそのチームの指導者に話を聞けばより理解は早いことと思います。そうする中で自分なりの指導法を作り上げていくのが一番の早道ではないかと思います。

生徒に指導者が本物のハンドボールを感じさせることができる人は別にして、プレイヤーには「本物とはどんなものか」を見せてほしいと思います。一流のゲームや一流のチームの練習を見せてやればハンドボールの技術や練習がどんなものであるのかを感じてくれるはずです。また、何よりも動機づけになり一石二鳥の効果があるでしょう。ましてや一緒に練習となればその効果は言わずともである。

「井の中の蛙」でいるよりも、指導者共々外にでていろんな人、いろんなハンドボールと接してほしいと思います。

練習の内容

どんなチームでも練習のメニューは同じようなものである。ただ、計画的に練習を行っているか、練習の質量が正しいか、また練習に工夫が加えられているか等には大きな差がある。

練習のメニューは大きく分けると次の4つである。

1　技術(道具・動作)づくり

「技術づくり」という用語はないが、ゲームは技術を手段として作り上げられる。いわばゲームを作る道具になる。その道具を作るという意味で技術づくりという言葉を使ってみた。技術は判断とそれに基づく動作が必要であるが、技術の中で道具に匹敵するものが動作である。

ここでは、主に動作を作り上げる練習である。シュートやパス、或いは2～3人で行うポストプレイ等ゲームで使用する動きの形・パターンを習得する練習である。練習の要点としては動作を正確にまた習慣化するように回数を重ねることが大切である。

技術には個人のものとグループのものがある。

◎個人技術
　パス、キャッチ、シュート、
　フェイント(1対1の突破)、
　ディフェンス技術等

◎グループ技術(戦術)
　各種の突破法(カットイン、
　ポストプレイ、ブロックプレイ等)

2　技術(道具)の使いこなし

3対3の攻防など、相手がいる中で技術を使いこなす「攻防練習」である。最小単位は1対1である。状況を正しく判断して何をなすべきか、動作を選択することが練習の要点である。

◎1対1の攻防
　2対2の攻防
　3対3の攻防　等

◎攻防場面の取り方
　サイドや中央で、速攻やセットで

3　ゲームの構想の中での技術(道具)の使いこなし

ゲームの構想に応じて、チームのプレイヤーに役割分担を行い、それを果たす練習である。最終的な練習の形は、7対7のゲームである。この練習を行うためにはチームがどの様な試合を行うのかその構想がなければならない(ゲームの構想には別な稿で説明します)

◎6:6
　セット　速攻　防御
　特殊場面の練習

◎ゲーム形式の練習
　ゲーム形式での技術戦術的練習

4　技術(道具・動作)の質の向上(体力トレーニング)

技術はその動作を支える体力があって初めてその効力を発する。

ハンドボールの技術は相手との対応の中で発揮されるために、判断と技術と体力の三位一体が求められるが、体力はあればあるほど技術をより有効にする性質を持っている。

この項に関しては医科学委員会の西山先生が詳しく書いて下さいますので省略します。

技術づくりと技術の使いこなしの区別について

技術練習を行う場合、技術を作る練習とそれを使いこなす練習の区別を意識して行うことが大切である。判断に重きを置いた攻防練習ばかりで、しっかりとした動作を習得する練習を怠ると結局は良い技術(技術・動作)が身につかず、将来の伸びを摘むことになりかねない。切れ味の良いどんな相手でも通用する技術(動作)づくり、技術の手入れは常々の課題であり、使いこなしとは区別されなければならない。

◎このことを例に取って説明すると

「1対1の攻防練習」を行うとする。一方が抜き片方が守る。この中でオフェンスやディフェンスが行う技術(道具・動作)としては左記に示すようなものがある。1対1の攻防練習ではこれらの技術を相手に応じて使いこなすことが要求される。即ち、プレイヤーは刻刻変化する状況を読み、何をするかの判断が求められるわけである。フェイク動作、間合い、抜く方向等が適切であったかどうかなど、デフェンスでは詰めのタイミング、方向の読み、動作の選択が適切であったのか等が試される。

判断が要求される1対1の攻防練習に対して、それに必要な技術づくりの練習がある。左記にある項目がそれであるが、今までの生活スポーツ経験から言えば出来るのから専門的に練習を必要とするものまである。1対1の攻防練習の状況から不足している技術を1対1の練習と並行して習得させ、1対1の攻防がより良い技術(道具・動作)の連続として行われるようにすることが必要である。

●1対1を構成する技術(道具・動作)

オフェンス側技術

◎位置の取り方(スタンス)
◎ボールのもらい方(カットイン、キャッチ)
◎ストップ
◎方向変換
◎フェイク
◎ドリブル
◎シュート

ディフェンス側技術

◎位置の取り方(スタンス)
◎詰め方
◎ボールプレッシャー
◎ボールカット
◎ボディプレッシャー
◎動きにつく
◎シュートブロック
◎シュートカット
◎シュートプレッシャー

今回はここまで。

新連載　ハンドボール競技選手の
コンディショニング

スポーツ医科学委員長　西山　逸成

男子ナショナル選手（平成4年7月）の体力水準を、ミュンヘン、モントリオール、モスクワ、ロサンゼルスの各オリンピック20年間にわたる歴代オリンピック選手との比較でみると、体格や筋力では変化ないが、瞬発力、柔軟性および腹背筋持久力等の運動機能では低下傾向がみられる。

この傾向と現状から筆者等は、男女ナショナルチームの体力水準を憂うあまり、ナショナル選手の選考条件に体力標準値を提案した。

すなわち、全身持久力では、最大酸素摂取量57.0mℓ／min／kg、筋力指標としては、背筋力指数（背筋力／体重）3.0、握力指数（握力／体重）1.0を目標水準（逐次要求水準は現況により段階的に示す）とした。

ナショナルチームの選手・スタッフの国際大会参加所見にみる体力観では、多くが日本選手はパワー・筋力・スタミナに劣り、前・後半通じて瞬発的な無機的運動を間欠的に持続させる能力に欠ける。したがってシュートコントロールやパス・キャッチを始めとした基礎的技術、ゲーム展開や選手交代等の基本的状況判断能力に欠けてくる。この傾向は、疲労した後半に多くみられるようになる〃また韓国に胸を借りる高校、大学、実業団等の日本の選手・指導者は、ハンドボール選手としての体力が必要であるとか、その体力水準が低いから外国選手に対してその技術以前に高さとパワーの前に敗退せざるを得ないとか、技術では負けなかったが体力で敗れたとか、等未だに日本選手の体力の低さの反省所見が多く聞かれる。一年後に広島アジア大会を控えた今こそ、協会が危機感をもって、体力・技術両面から真に近い将来、世界のトップを狙う選手づくりに一丸となった組織体制づくりを実現して欲しい。

体力づくりマニュアルの作成・配付が体力づくりの即実践につながっていない現状である。確認やフォローのための巡回指導も体制の不可欠な一環でもあるので実現を望みたい。

また体力づくりの考慮範囲も、単にウェートトレーニングやサーキットトレーニングに止まらずに、ひろく生活管理、栄養管理、休養管理、体力トレーニングの方法、スポーツ障害と筋力等を土俵としたい。

1.メディカルチェック

整形外科

- 左足関節外側靱帯損傷（B－1）
- 右足関節捻挫（B－1）
- 腰椎椎間板ヘルニア（B－2）
- 左母趾分裂種子骨（B－1）

整形外科的評価

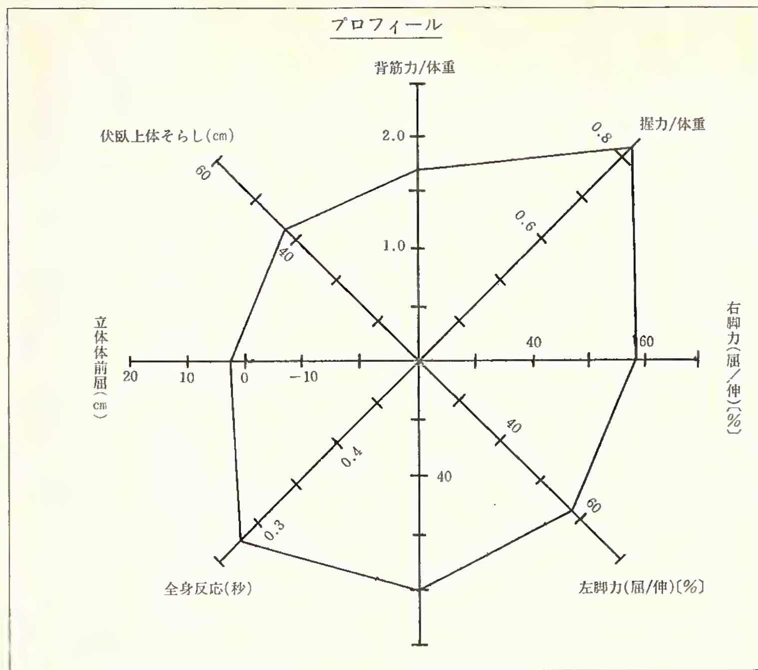
分類	管理	スポーツ
A　（正常）	なし	継続
B－1（観察）	自己	継続
B－2（注意）	指導者	継続
C－1（精査）	医師	継続（制限）
C－2（治療）	医師	中止

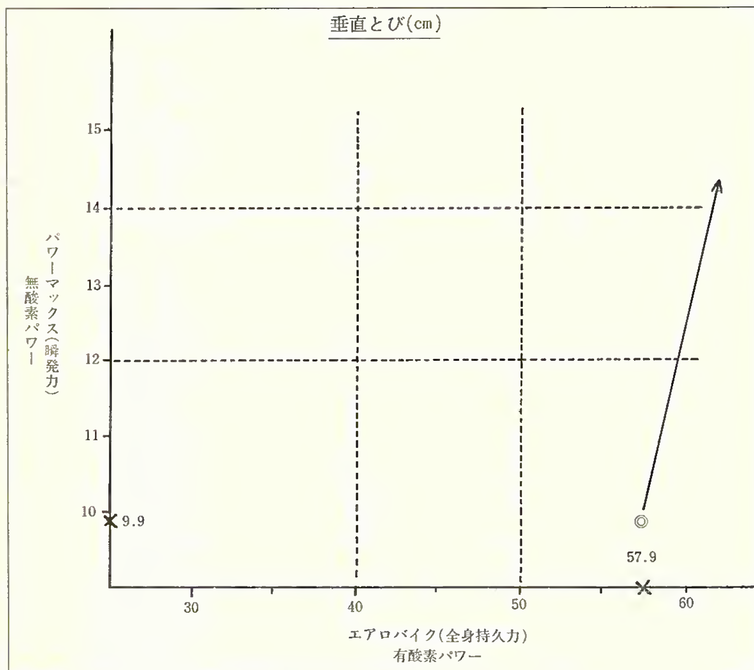
内科

1.血精鉄低値→栄養の改善、栄養素特にミネラル補食（鉄、ビタミンC）
2.コンディション不良
　睡眠障害

2.体力づくりの方向

強化部位	注意事項
背筋力、腹背筋	背筋力指数→2.5以上
握力	握力指数→0.8以上
瞬発力	垂直跳び→60cm以上
柔軟性	敏捷性、瞬発力の基本条件として向上努力
等速性筋力（Isokinetic）	
ベンチ・プレス	88.7％（kg/weight）→100％を目標
スクワット	171.3％（kg/weight）→250％を目標
レッグエクステンション	右 28.9kg（屈曲）/49.4kg（伸展） 58.5％→65％
・レッグカール	左 28.1kg（屈曲）/48.6kg（伸展） 57.8％→65％
	傷害防止のため屈筋力の強化65％以上を目標





韓国選手の下半身の強靱さは、試合全般を通じた軽快・敏しょうなフットワークにみられており、これが少年・少女から一貫した技術体系とともに、世界のトップ水準を維持し続けている根元であろう〟と評している。

韓国チームと合同練習した選手は、フットワークを主体とした連日1時間半に及び基本運動に30分間も耐えられず〝下半身とくに脚筋力の弱さを痛感した〟と異口同音に本誌上に何年来も述べられている。

日本選手でも世界に通じる選手は輩出されている。先般本誌332号（1993、7月）に紹介された日本リーグ通算612得点達成の西山選手の体力水準の高さの一端を示す背筋力指数（背筋力／体重）3.0は、学生時代から34歳の今日まで未だに劣えないと聞く。同水準の選手では蒲生全日本監督、中山全日本選手にみられる。

この事実からも期待の星は高水準の基礎体力を保っていることが、技術やスポーツ障害の克服を可能にしているのではなかろうか。

次回から、トレーニング管理―体力づくりのすすめ方―から取り組んでいきたい。

体力づくりのカテゴリーは、現在毎年1回ナショナルチームで実施している**健康診断**（メディカルチェック）―**体力測定**―**トレーニング処方**（個人別処方）の段階をふまえた実施により、各個人の今後の体力づくりや健康管理のためのフィードバックを窮極の狙いにしている。その一例は「表1」に示すとおりである。

読者諸兄から寄せられている〝将来のナショナル選手として完成度の高い体力づくりをすればよいか〟に答えるべき十分な努力をしたい。

田口隆のドイツ研修レポート

ノルウェーの練習を見て

今回は、ノルウェーでのトレーニング及びゲーム観戦を通じ、報告します。私は、ドイツに来る前に、ドイツ以外の国々のハンドボールを見てみたいという事が頭にありました。それで昨シーズンは、ドイツで約1シーズン見続け、今シーズンは残りの少しの時間を北欧のチームを見てみたいと思い、行って来ました。

訪れた先は、オスロを中心にクラブチーム5チームとナショナルJr.（19才）チームのトレーニングなどを見学してきました。

★ ★ ★

最初に訪れた先は、Veitvetというチームで、昨シーズン2部でトップになり、今シーズンから晴れて1部でプレー出来るという事からか、活気のある雰囲気が感じられました。このチームの監督は、スロバキアの人で、2年前からこのチームで監督兼プレーヤーとしてクラブからの収入を得ています。このクラブでは、この監督だけがクラブからお金をもらっている人という事でした。財政面はあまり良くなく、スポンサーも大きくはなく、試合の移動費等でなくなってしまうそうです。トレーニングの方は1/3がボールさばきとでも言うべきか、2人1組でボールを2つ使い、行うという様な事が行われ、残り2/3のそれぞれ半分くらいずつパス廻しからシュート（コンビプレーの確認）と、6対6にあてられていました。リーグの第1戦が近日中にあるという事でした。

あとオスロでは、2チーム見学したのですが、私がちょうど訪問した時は、トレーニングゲームが入っていて、それを見て来ました。2部と1部下位のチームという事で、内容的にはミスが多いものの、小気味の良いプレーが見られました。

次にオスロから南へ約100km程離れたSandefyordという街を訪れました。この街にはノルウェー1、2位のチームがありました。ひとつはRunarというチームで、監督はスウェーデンの人で、選手にももう1人スウェーデン人がいました。このチームは、オスロで見たチームよりも大きく、力強さを感じました。次の日のパリで行われる大会に行くという事で、軽い内容ではありましたが、1時間ぐらいのトレーニングを見ました。

内容としては、各ポジションでのシュート練習と速攻でのボール継ぎの練習でした。速攻では動きがあらかじめ決められ、その動きを反復する形で行われました。次にSandefyordというチームに行きました。このチームにはナショナル選手が5人と、ジュニアナショナルの選手が5人いるという事で、この日はジュニアナショナルの選手が世界ジュニアに参加しているという事で、12～13名でのトレーニングでした。サッカーに始り、インターバルでのランニング、メディシングボールを使った体力トレーニング、パイロンを使ってのフェイントから大きく横へ流れるシュート、フェイントからDFの背中へ入って打つシュート（シュートはもちろんの事、バランスを上手にとる様にとの指示が出ていました）。

トレーニングの後、顔を知っていたGKと食事をしながら話をしたところ、なぜSandefyordに良い選手が集まってくるのかという事を尋ねたところ（RunarとSandefyordの2チーム以外はかなり実力的に差があるという事を前に訪問したチームで聞いた）、良いスポンサーに恵まれ、良い環境にあると言っていました。他のチームでは、完全なアマチュアであるのに比べ、この2チームでは、ドイツ、スペイン、フランスの様ではなくとも、収入を得られるのが良い選手が集まってくる条件だと言っていました。

★ ★ ★

最後に、2泊3日で行われたジュニアナショナルの合宿に行ってきました。選手は全員1974年生まれで、次回の世界ジュニアを目指すという事で、今回集められたそうです。この合宿では、ノルウェー式3－2－1DF、6－0DFの基礎をするという事で始まりました。まず徹底したフットワークから始まり（どの種類のトレーニングにもサイドステップとターンが入る。例えばシュートを打った後にサイドステップを入れるとかいう様に）、ボディチェック、ボールに対しての各ポジションの位置どり等行われました。各トレーニングとも反復する事に多くの時間を取り入れていました。全体にあまり身体は大きくないが（中には1人2mの選手もいました）バランスの良い選手がいて、スピーディなハンドボールをしていました。

このチームは年間30日程の合宿を計画しているそうです。

少しの期間ではありましたが、又ひとつ違ったものを見る事が出来、私にとってはかけがえのない財産になったと思います。これを今後に役立てる様努力したいと思っています。



三重県ハンドボール協会





「ハンドボール人口をふやそう」が合言葉

三重県ハンドボール発展の歴史は、昭和23年、当時日本体育専門学校（現日体大）の学生であった日沖修氏が初めてハンドボールという競技を県内に紹介し、大学卒業後の24年に県内初のハンドボールチーム（高田高校）を誕生させた時に始まります。

翌25年には三重県ハンドボール協会が発足、以来今日まで40年を超える歴史を刻んできました。

現在でこそ協会役員も50名を超え、審判員の数も増えて大会運営もスムーズに行なわれるようになってきましたが、協会創設当初は人材も限られており、その少数の方々の、まさに献身的な努力と情熱によって三重県協会発展の礎が築かれてきたといえるでしょう。

そんな三重県のハンドボール界に活気を与えてくれたのが実業団チームの活躍でした。昭和35年に男子の本田技研チームが、37年には女子の田村紡チームが相次いで誕生。以後数々の国内タイトルを獲得すると共に、男女ナショナルチームにも数多くの選手、指導者を送り続けてきました。

そんな中で、昭和39年から12年間県協会長を務められた田村正衛氏が、44年から52年まで日本協会会長としても活躍され、県内のみならず日本のハンドボール界発展のため大きな足跡を残されたことも忘れることはできません。

また田村紡チームは昭和50年、三重国体優勝を花道に解散しましたが、その伝統はその後誕生したジャスコチームの活躍に受け継がれています。

昭和41年、県協会生みの親とも言うべき日沖先生が病のため急逝され、その後を引き継がれたのが当時27才の中根武彦氏でした。氏は以後平成3年に勇退されるまで、実に23年にわたり県協会理事長の重責を果たされ、ハンドボール界の充実と発展のため尽力されました。

その間、昭和45年、49年に全日本教職員大会、48年インターハイ、50年国民体育大会と数々の全国レベルの大会を三重県で開催し、また本田技研、田村紡、ジャスコをはじめとする実業団チームの華々しい活躍の陰に、やや後れをとっていた感があった中高校生においても、53年に四日市工業高校がインターハイで第3位入賞、58年西笹川中学校男子が同大会で見事に連続優勝を果たすなど、着実にそのレベルアップが図られてきました。

現在は岡田克也会長、鈴木義男理事長のもと、三重県のハンドボールは県スポーツ界のリーダー的役割りを果たしていると自負できるまでに発展してきましたが、これもみな前述の諸先輩方の努力と熱意の結晶と感謝いたしております。

故日沖先生の業績を記念して設けられた「日沖杯争奪大会」も今年で28回を数え、今回は過去最高の99チームの参加をみました。このことは県内のハンドボール愛好者の広がりを示すものとして非常に喜ばしいことと思っています。しかし三重県のハンドボール界がさらに一層の飛躍をとげるためには、中高校生の普及面など、解決しなければならない課題も多く残されています。

昭和44年、谷口克興氏（現強化部長）等の尽力により創刊された県協会機関誌「あゆみ」の存在も本県が他に誇ることのできるものの一つですが、その表紙に毎年記されるスローガンである「ハンドボール人口をふやそう」を全員の合言葉に、伝統ある東海各県や日本協会の指導を仰ぎつつ、今後共さらに努力してゆきたいと思っております。

各地の大会結果

関東

埼玉県高1大会

（8月21～23日／筑波大附坂戸高校グランド）

◎**男子**

▼予選リーグ順位

〔A〕①花咲徳栄②緑ケ丘③上尾沼南〔B〕①大宮南②埼玉栄③岩槻〔C〕①川口青陵②城北埼玉③越谷西〔D〕①浦和市立②羽生第一③三郷北〔E〕①庄和②鴻巣③和光〔F〕①所沢北②川越南③朝霞西〔G〕①岩槻北陵②八潮③大井〔H〕①川口東②浦和南③小松原〔I〕①草加②狭山〔J〕①浦和学院②上尾南③上尾東〔K〕①春日部東②川口北③吹上〔L〕①川口工業②大宮北③秩父〔M〕①志木②坂戸③朝霞〔N〕①埼玉第一②草加東③越谷南〔O〕①西武台②春日部共栄③三郷工技〔P〕①春日部工②久喜北陽③城西川越〔Q〕①浦和実業②涌川③大谷〔R〕①伊奈学園②浦和西③農大三〔S〕①春日部②筑波坂戸

▼1回戦

春日部東 15―11 所沢北
草加 12―9 庄和
大宮南 9―6 浦和市立

▼2回戦

春日部東 17―4 花咲徳栄
川口工業 14―4 志木
浦和学院 11―2 浦和実業
川口青陵 9―8 川口東
春日部工 10―5 草加
埼玉第一 11―9 春日部
西武台 16―4 岩槻北陵
大宮南 17―11 伊奈学園

▼3回戦

春日部東 10―8 川口工業
浦和学院 15―4 川口青陵
埼玉第一 7―7 2PTC1 春日部工
大宮南 11―9 西武台

▼準決勝

浦和学院 18―3 春日部東
大宮南 16―9 埼玉第一

▼順位決定戦

川口工業 13―10 川口青陵
春日部工 13―10 西武台

▼7～8位決定戦

川口青陵 16―13 西武台

▼5～6位決定戦

川口工業 16―16 2PTC1 春日部工

▼3位決定戦

埼玉第一 12―12 1PTC0 春日部東

▼決勝

浦和学院 14（7―4、7―3）7 大宮南

◎**女子**

▼予選リーグ

〔a〕①小松原女②庄和③春日部女〔b〕①草加春日部工②浦和市立③浦和商業〔c〕①伊奈学園②浦和西③大宮北〔d〕①上尾南②大宮開成③秋草学園〔e〕①八潮②川口北③騎西〔f〕①浦和実業②大宮南③狭山〔g〕①埼玉栄②浦和学院③三郷北〔h〕①熊谷女子②春日部東③不動岡誠和〔i〕①川口女子②八潮南③越谷南〔j〕①所沢北②吹上行女③宮代幸手商〔k〕①川口青陵②川口東③草加南〔l〕①浦和南②筑波坂戸③朝霞

▼1回戦

小松原女 11―6 上尾南
草加春日部工 13―3 浦和南
八潮 9―2 伊奈学園
浦和実業 15―3 所沢北

▼2回戦

川口青陵 16―9 小松原女
草加春日部工 12―6 川口女子
八潮 11―8 熊谷女子
浦和実業 14―5 埼玉栄

▼準決勝

川口青陵 12―10 草加春日部工
浦和実業 14―7 八潮

▼順位決定戦

小松原女 12―8 川口女子
埼玉栄 13―9 熊谷女子

▼7～8位決定戦

熊谷女子 11―6 川口女子

▼5～6位決定戦

小松原女 8―7 埼玉栄

▼3位決定戦

八潮 18―7 草加春日部工

▼決勝

浦和実業 13（7―2、6―4）6 川口青陵

信越

北信越国体

◎**成年男子1部（リーグ戦）**

石川 21―19 福井
富山 26―26 福井
富山 29―21 石川
長野 21―17 福井
石川 29―19 長野
富山 38―19 長野
福井 40―9 新潟
石川 46―9 新潟
富山 40―17 新潟
長野 30―15 新潟

（順位）①富山②石川③福井④長野⑤新潟

◎**成年男子2部**

▼1回戦

石川 26―19 福井

▼2回戦

富山 26―24 石川
長野 29―15 新潟

▼決勝

長野 29（16―11、13―10）21 富山

◎**成年女子**

▼1回戦

石川 43―18 新潟

▼2回戦

石川 35―19 福井
富山 30―15 長野

▼決勝

石川 34（14―10、20―8）18 富山

◎**少年男子**

▼1回戦

福井 33―6 新潟

▼2回戦

石川 24―18 福井
富山 30―14 長野

▼決勝

石川 23（10―10、13―4）14 富山

◎**少年女子**

▼1回戦

富山 18―17 福井

▼2回戦

石川 15―13 富山
長野 31―18 新潟

▼決勝

石川 33（16―2、17―8）10 長野

東海

三重県総合選手権大会

（8月29日～9月12日／津東高）

◎男子

▼1回戦

鵜ノ森クB 21－15 上野工高
四日市南高OB・A 21－14 桑名北高B
四日市中央工 12－0 ポンタクラブ
朝明高 12－7 津高B
白子クラブ 15－14 津高OB
尾鷲クラブ 24－12 四日市中央ク

▼2回戦

本田技研鈴鹿 26－8 鵜ノ森クB
宍一クラブ 31－8 鳥羽商船OB
桑名西高 12－10 四日市西高A
上野高A 22－12 むつみケ丘B
本田クラブ 33－5 鈴鹿高専
四日市工高B 27－14 海星高A
桑名工高 14－7 桑名高A
三重教員 35－3 四日市南高OB・A
西朝明倶楽部 23－16 暁高
オールド鵜ノ森クB 22－12 高田高B
津高A 21－10 尾鷲高
桑名北OBB 22－17 むつみケ丘A
四日市工高A 39－6 津西高A
四日市南高OB・B 31－15 鳥羽商船
亀山クラブ 31－11 津工高
鵜ノ森クA 19－10 四日市中央工
西笹川ク 37－6 朝明高
四日市南高 18－14 桑名北高A
津東高 22－2 上野高B
桑名北高OB・A 20－19 桑名工高OB
三重大学 25－11 名張西高OB
桑名高A 18－7 四日市高
四日市西高OB 21－7 不断桜
四日市四郷クラブ 13－10 オールド鵜ノ森クA
白子クラブ 20－6 高田高A
三菱油化 19－14 海星高B
梅ノ木ク 22－16 川越高
亀山高 37－1 津高C
四日市四郷高 13－12 オールド鵜ノ森クC
45四工クラブ 28－3 津西高B
桑名西クラブ 22－17 八稜星
三重選抜 35－9 尾鷲クラブ

▼3回戦

本田技研鈴鹿 19－18 宍一クラブ
桑名西高 21－18 上野高A
本田クラブ 27－10 四日市工高B
三重教員 22－13 桑名工高
西朝明クラブ 20－12 オールド鵜ノ森クB
桑名北高OB・B 25－12 津高A
四日市工高A 32－12 四日市南高OB・B
鵜ノ森クA 17－12 亀山クラブ
西笹川クラブ 28－14 四日市南高
津東高 12－0 桑名北高OB・A
桑名高A 14－9 三重大学
四日市四郷高ク 17－7 四日市西高B
白子クラブ 15－12 三菱油化
亀山高 20－11 梅ノ木ク
45四工クラブ 17－16 四日市四郷高
三重選抜 35－14 桑名西ク

▼4回戦

本田技研鈴鹿 45－5 桑名西高
本田クラブ 24－18 三重教員
西朝明倶楽部 23－15 桑名北OBB
四日市工高A 19－15 鵜ノ森クA
西笹川クラブ 32－12 津東高
四日市四郷ク 13－10 桑名高A
亀山高 12－10 白子クラブ
三重選抜 28－9 45四工ク

▼5回戦

本田クラブ 22－19 本田技研鈴鹿
四日市工高A 29－15 西朝明倶楽部
西笹川クラブ 27－12 四日市四郷ク
三重選抜 20－11 亀山高

▼準決勝

本田クラブ 29－17 四日市工高A
西笹川クラブ 29－28 三重選抜

▼決勝

本田クラブ 39（16－7、23－11）18 西笹川クラブ

◎女子

四日市高 19－18 キューティマヨネーズ
三重大学 20－4 四日市四郷高
トマト 12－0 Kクラブ
西笹川クラブ 18－5 桑名西高OG
桜クラブ 5－3 桑名高
名張西高 13－4 八稜星
上野高 26－2 津高
四日市西高 14－5 むつみケ丘クラブA
白子クラブ 17－9 暁高OGB
津東高 21－2 鳥羽商船
暁高OGA 25－5 松阪女子高
四日市南高OG 14－11 上野高OG
むつみケ丘クラブB 22－4 桑名西高

▼2回戦

暁高 37－3 四日市高
三重大学 22－9 トマト
西笹川クラブ 25－5 桜クラブ
暁高OGC 13－10 名張西高
三重選抜 22－9 トマト
白子クラブ 18－7 四日市西高
暁高OGA 16－10 津東高
むつみケ丘クラブB 21－10 四日市南高OG

▼3回戦

暁高 16－4 三重大学
暁高OGC 23－10 西笹川クラブ
三重選抜 24－6 白子クラブ
暁高OGA 19－11 むつみケ丘B

▼準決勝

暁高 18－11 暁高OGC
三重選抜 30－6 暁高OGA

▼決勝

三重選抜 14（8－4、6－4）8 暁高

近畿

大阪高校秋季総合大会

（8月17～19日／桃山学院高他）

◎男子

▼1回戦

桃山学院 18－5 堺東
北陽 24－6 西寝屋川
桜宮 9－6 春日丘
此花学院 23－11 三国丘
初芝 18－5 清風
北千里 15－8 三島
都島工 26－6 島上大冠

上宮 20－19 大商大堺
▼2回戦
桃山学院 17－11 北陽
此花学院 13－11 桜宮
初芝 16－12 北千里
都島工 20－15 上宮
▼準決勝
此花学院 17－10 桃山学院
都島工 20－13 初芝
▼決勝
此花学院 15（9－6, 6－4）10 都島工

◎女子
▼1回戦
宣真 15－4 城南学園
堺東 17－12 門真南
金蘭会 15－5 東百舌鳥
阪南 18－11 摂津
四天王寺 22－1 大東
福島女子 13－12 住吉商
春日丘 20－12 鳳
大谷 15－7 桜宮
▼2回戦
宣真 32－8 堺東
阪南 14－12 金蘭会
四天王寺 10－5 福島女子
大谷 21－6 春日丘
▼準決勝
宣真 19－14 阪南
四天王寺 8－6 大谷
▼決勝
四天王寺 17（7－7, 6－6, 2－2, 2－1）16 宣真

中四国

中四国学生秋季リーグ戦

（8月25～27日／会場不明）

◎**男子1部**
広島大 25－16 山口大
山口大 17－16 松山大
山口大 27－22 広島経済大
山口大 21－15 広島修道大
広島大 16－16 松山大
広島経済大 19－16 広島大
広島大 23－12 広島修道大
松山大 16－13 広島経済大
松山大 24－16 広島修道大
広島修道大 18－12 広島経済大
（順位）①山口大学②広島大学③松山大学④広島経済大学⑤広島修道大学

◎**男子2部**
愛媛大 17－13 近畿大
愛媛大 19－14 高知大
愛媛大 17－10 鳥取大
愛媛大 22－12 香川大
近畿大 23－20 高知大
近畿大 27－24 鳥取大
近畿大 26－18 香川大
高知大 18－10 鳥取大
高知大 18－14 香川大
鳥取大 15－10 香川大
（順位）①愛媛大学②近畿大学③高知大学④鳥取大学⑤香川大学

◎**男子3部**
〈Xグループ〉
岡山大 19－14 徳島大
岡山大 18－14 広島工業大
徳島大 13－11 広島工業大
〈Yグループ〉
島根大 17－12 徳山大
島根大 18－11 川崎医福大
徳山大 19－14 川崎医福大
▼順位決定戦
岡山大 15－14 島根大
徳島大 16－15 徳山大
広島工業大 20－11 川崎医福大
（順位）①岡山大学②島根大学③徳島大学④徳山大学⑤広島工業大学⑥川崎医療福祉大学

◎**女子I部**
愛媛大 17－14 広島大
愛媛大 17－9 岡山県立短大
愛媛大 26－4 高知大
広島大 18－18 岡山県立短大
広島大 21－9 高知大
岡山県立短大 25－15 高知大
（順位）①愛媛大学②広島大学③岡山県立短期大学④高知大学

◎**女子II部**
岡山大 8－4 川崎医福大
四国大 8－7 岡山大
岡山大 16－3 鳴門教育大
岡山大 13－12 香川大
川崎医福大 17－13 四国大
川崎医福大 15－11 鳴門教育大
香川大 12－11 川崎医福大
鳴門教育大 18－14 四国大
四国大 14－13 香川大
鳴門教育大 14－10 香川大
（順位）①岡山大学②川崎医療福祉大学③四国大学④鳴門教育大学⑤香川大学

九州

九州学生リーグ秋季大会

（8月26日～30日／沖縄県東風平町町営体育館）

◎**男子一部**
福岡大学 29－19 東和大学
福岡大学 39－19 沖縄国際大学
福岡大学 37－24 福岡教育大学
福岡大学 31－17 西南学院大学
福岡大学 40－19 熊本大学
東和大学 22－22 沖縄国際大学
東和大学 34－30 福岡教育大学
東和大学 27－20 西南学院大学
東和大学 30－14 熊本大学
沖縄国際大学 32－25 福岡教育大学
沖縄国際大学 19－16 西南学院大学
沖縄国際大学 31－19 熊本大学
西南学院大学 32－25 福岡教育大学
福岡教育大学 32－27 熊本大学
西南学院大学 28－18 熊本大学
（順位）①福岡大学②東和大学③沖縄国際大学④西南学院大学⑤福岡教育大学⑥熊本大学

◎**男子二部**
（順位）①九州産業大学②九州大学③熊本商科大学④鹿児島大学⑤第一工業大学⑥長崎総合科学大学

◎**男子三部**
（順位）①琉球大学②久留米工業大学③大分大学④九州共立大学⑤第一経済大学

◎**男子四部**
（順位）①熊本工業大学②福岡工業大学③九州工業大学④宮崎大学⑤西日本工業大学

◎**女子**
福岡大学 26－20 福岡教育大学
福岡教育大学 35－11 九州女子大学
福岡教育大学 38－9 沖縄国際大学
福岡教育大学 23－19 琉球大学
福岡教育大学 40－6 熊本短期大学
福岡大学 32－19 九州女子大学
福岡大学 33－10 沖縄国際大学
福岡大学 30－10 琉球大学
福岡大学 34－7 熊本短期大学
九州女子大学 12－12 沖縄国際大学
琉球大学 31－18 九州女子大学
九州大学 29－15 熊本短期大学
琉球大学 29－18 沖縄国際大学
沖縄国際大学 22－9 熊本短期大学
琉球大学 21－13 熊本短期大学
（順位）①福岡大学②福岡教育大学③琉球大学④九州女子大学⑤沖縄国際大学⑥熊本短期大学

●訂正とお詫び

前号13頁に掲載しました「第6回全国小学生大会に優勝して」の三佐ハンドボールクラブの原稿で、県名を熊本県と記載しましたが、大分県の誤りでした。当該チームの皆様にお詫び申し上げるとともに訂正致します。

28頁に掲載しました西日本学生選手権女子決勝の結果は左記の通り訂正し、お詫び申し上げます。

武庫川女子大 25（14－6, 11－9）15 大阪体育大学

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三三六号
昭和四十年六月七日 平成五年三月二十六日 印刷
第三種郵便物認可 平成五年十一月一日 発行
東京都渋谷区[illegible]一－一－一 編集兼
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 東京 六－五八三四八番 発行人 中澤重夫
定価三百五拾円
(年間購読料三千三百円)